

タイトル	タンザニア紹介～幸せについて考える～		
氏名	大久保 彰		
学校名	大阪星光学院中・高等学校		
担当教科	社会科（世界史）		
実践教科	世界史・LHR	時間数	14時間(中高各2時間×6クラス 小各1時間×2クラス)
対象生徒 学年	中1・中2・高2・高3 (出張授業で小2・小5)	対象人数	727名

カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ・タンザニアに関する学習を通じ、我々の生活を振り返り、「幸せ」について考える
- ・水問題やエイズ問題について考える
- ・世界史の教科書に出てくる「アフリカ史」の内容をより掘り下げ(奴隸問題など)て考える

(2) 授業の構成案

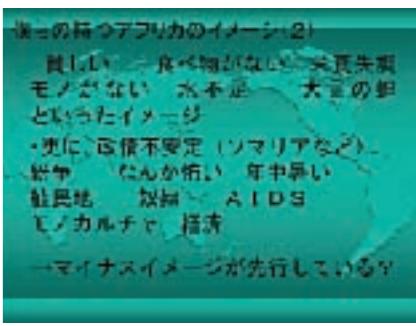
時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 テーマ:タンザニア紹介 ねらい:タンザニアでの見聞を紹介し、現在の我々の現況と比較	(1) タンザニアのイメージとは? (2) フォトランゲージでタンザニアクイズ (3) 水・貧困について (4) 幸せとは何か?を考える	(1) スライド (2) ビデオ上映
2限目 テーマ:エイズについて ねらい:エイズについて学ぶ	(1) エイズに関するクイズ (2) 人権問題に絡めて考察	(1) スライド (2) エイズに関する補助資料
3限目 テーマ:タンザニア史 ねらい:東アフリカ史を学ぶ	(1) 教科書世界史に出てくる内容をより広げ、実際的な問題(イスラーム商人・奴隸問題・植民地分割など)を考察	(1) スライド (2) 「タンザニア史」補助資料 (3) のち実力考查で問題にする

授業実践の詳細

第1時限「タンザニア紹介」(授業を受けた生徒総数727人)

参加メンバーが撮影した写真をパワーポイント(以下PP頁)にしてタンザニアで私が見聞したことなどを紹介した(フォトランゲージと撮影ビデオの併用)。

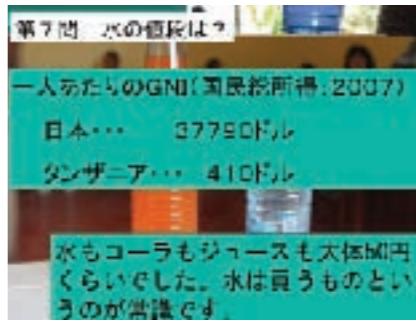
- (1) タンザニアの位置と私の訪問先・目的などを紹介
- (2) アフリカのイメージはどんなのだろうか?と問う
- (3) メンバーが作成した現地で撮影したビデオを放映(約20分)
- (4) タンザニアに関するクイズ
- (5) まとめ



最近こんな笑顔をしたことがある?という問いかけは反響が大きかった(pp1)



タンザニアクイズのひとつ
「ウガリ」を問う (PP13)



タンザニアの位置と僕が訪問した携帯電話もあります (PP26)
ところ(pp3)



多くの生徒にとってアフリカという地は貧困・病気といったマイナスイメージしかないようなところである。殊、タンザニアに関してはその場所さえも知らない生徒がたくさんおり、アフリカのどこかの国という漠然としたイメージしかない。

続いてビデオを上映した。メンバーの一人が撮影・編集してくれたものだ。ここに映る現地の人々の生き生きとした眩しいばかりの笑顔や、各所に映っている彼らの生活の様子などは、それまで生徒達が抱いていたアフリカのイメージとは大きくかけ離れていた。「最近、こんな笑顔をしたことがある?」という問いかけには、特に高校生に反響が大きかった。その後はクイズを通じて「考える」ための「問い合わせ

かけ」を幾つも投げかけた。まとめとして、以下の文章を生徒に提示した。

「いかがだったでしょうか？日本との関係やタンザニアの様子など、僕たちが持つアフリカのイメージとは少し違っていたのではないでしょうか。一面として、アフリカの多くの国は今の我々よりも物質的には恵まれておらず、その点だけをクローズアップして「貧しい」という単純な表現でまとめられる傾向にあります。「モノがない=貧しい」というのはあまりにも乱暴なまとめられたではないでしょうか。心からの笑顔が溢れているかといった気持ちの上での豊かさも忘れてはいけないと思います。」

第2時間「エイズに関する授業」(授業を受けた生徒総数549人)

エイズ専門家の角井さんによる現地での研修の話を軸とし、パワーポイントにしてクイズも織り交ぜ、エイズ問題及び基礎知識を紹介した。

- (1) 日本との比較をし、クイズ形式で人口・エイズ問題などを数として表現。また、分布図なども利用
- (2) 訪問した学校でのエイズ教育の様子を紹介
- (3) 基本的なエイズに関する知識の紹介（補助資料の使用）
- (4) 病気のことだけでなく、人の心・差別などについても言及
- (5) まとめ

エイズ問題に関する授業は生徒の関心も高く、以前に習ったものの、その内容は深くなく、表面的な問題であるという意見が多々あった。また、現在の日本の性教育に対しても疑問を投げかけるなど、生徒それぞれに意見が寄せられた。

また、授業内容は、単に「エイズとはどういった症状になる病気か」ということなどの「知識」という内容に留めず、「もしも友人がHIVに感染したら？」「もしも自分がHIVに感染したら？」という問い合わせました。心の問題などにも言及し、その点も考えるよう促した。

すべての時間に共通するが、授業終了後は感想文を書かせている。授業始まりに感想文の内容が空疎で手抜きなものならば、突き返し、再提出させる。という旨を紹介し、良い作品は学年通信にして生徒に紹介した。

生徒達は真摯にこの問題に応じてくれ、それぞれに持つ意見を書き込んでくれた。（感想文は後掲）

第3時間「タンザニア史」(授業を受けた生徒総数82人)

高校3年生対象に、現在使用している世界史の教科書（東京書籍）の内容を踏まえた上で、主に東アフリカに焦点を置き、教科書の内容をより発展させ、現地で私が体験した事なども織り交ぜて、タンザニア史を研究。パワーポイント使用。

- (1) プリント配布（「タンザニア史」）、フォトランゲージによるタンザニア紹介
- (2) ムスリム、ダウ船、奴隸貿易などを紹介
- (3) アフリカの現況を紹介
- (4) （後日）実力考查の問題に大学入試に即した「タンザニアを中心とした問題」を出題

入試内容に即した内容を提示し、また資料をPPで紹介。終止和やかな雰囲気の中授業は展開された。生徒の反応は悪くなかった。

その他として

- ・本校において年に一度刊行される『雑誌星光』に訪問記を寄稿
- 『雑誌星光』…本校の生徒・教職員・OBの文・作品などを掲載する刊行物
- ・学園祭に於いて、パネル展示「タンザニアで活躍する日本人の人たち」を行った

【生徒の感想文】

生徒・児童には授業の都度、感想文を書いてもらった。授業を行うに際して私がコンセプトとしたのは、「授業の結論はもちろん出さない。それぞれの生徒がそれに自分の意見を持ち、考え、意見を表現する」である。総数は、のべ約1400人分に上るが、以下誌面の都合上数名だけ紹介する。

・「何も知らなかった」というのが正直な感想だった。自分は「アフリカ」を知っているが、それは地理的なことや断片的な歴史の一部であって、これらは单なる知識に過ぎない。そのような知識を積み上げてなお先行するマイナスイメージを払拭できない。それでいて「アフリカ」を知ったつもりでいる。これは全く何も知らないことに等しい。そういうことをアフリカのほんの一部に過ぎないタンザニアのほんの一面をしかも他人を介して垣間見ただけだというのに強く感じる。非常にショックなことだ。特にマイナスイメージを払拭できない点に関しては自分でない気がしてならない。1960年が「アフリカの年」と言われるようアフリカ諸国の独立は最近の出来事だ。当然それに伴う争いもおこった。ビアフラ戦争などが挙げられる。他にもルワンダやブルンジの内戦、コンゴ動乱などは遠く離れた日本でも有名な話だ。それはグローバル化する社会でのメディアのおかげである。遠く離れた国で戦争が起きれば日本のニュースや新聞はそれを報道する。先日のレバノンやグルジアでの件もそうだったように。しかし、幸せに暮らしているアフリカの家族があることをメディアは報じるだろうか。時々見かけるにしても、その機会は圧倒的に少ない。そして戦争に比べて印象は薄い。人間はネガティブなことのほうが印象に残るので仕方ないことであるが。スクリーンに写されたタンザニアの子供たちの笑顔は事前にあった話の通り輝いていた。彼らが幸せを感じて生きている証拠だ。親がいない、貧しい、そんな事情があっても彼らは笑っていた。日本の子供たちはどのように笑うことはできないだろう。自分も含めて。テレビゲーム以外の遊びを知らず、夢を見るとも、信じる者を失って、毎日を憂鬱に感じ、拳銃の果てには自らの命に終止符を打つことも厭わない子供たちと、一体どちらが「幸せ」なのか。

日本で生まれ、豊かな生活を覚えた我々が例えればタンザニアに暮らすとする。最初は苦しいだろう。環境も、食べ物も全く異なる。「ある」状態から「ない」状態に移るのは難しい。しかし、食べるものを食べている限り、死にはしない。要は「幸せ」は心のありようのではないか。途上国の人々を見て「かわいそう」と思うこと自体、上から目線の表れであるのだ。今考えれば日本人の方が「かわいそう」なのではないだろうか。

アフリカを始め各地でエイズ撲滅運動が盛んになっている。そして少しずつ効果が表れているという。一方日本ではエイズ撲滅はあらゆる形でずっと呼ばれているというのにエイズ人口は増える一方である。

一体日本人は何に意識を向けているのだろうか。ここまで日本を悲観して、自分は日本を知っているだろうかと考えた。タンザニアの一面に触れて「迷える国」と評した日本に正しい道を示すことができるだろうか。これからこの国的一部を担う年齢にして、もっとこの国を知ろうと思った。そのためには海外に出てみようと思う。それも素敵な先進国ばかりを巡るのではなく。

自分は機会があれば青年海外協力隊に入りたいと思っている。そして海外から日本を見て、新たな一面を知る。宇宙から地球を見て感動した宇宙飛行士のように。笑顔の素敵な子供たちに訊ねたい。「幸せ」とは何なのかを。幸せとは?——自分は答えられない。結局、自分は何も知らなかったのである。(高3)

・私はあのビデオを見て「いい人間になりたいなあ」と思いました。だから勉強してよかったです。ありがとうございました。(小2)

・タンザニアの授業を受けるまで私は「貧しい」というイメージだけしか持っていました。でも授業を受けてから貧しいけれど、生きようと頑張っていて、明るいというイメージになりました。服が破れていても明るく笑っていられることがすごいと思いました。先進国での「あたりまえ」は発展途上国にとっては「とても」すごいことでもあるかもしれません。無駄なく生活して頑張るタンザニアの人々はすごいと思いました。(小5)

・僕はフィリピンに滞在していたことがあります、地元の学校の人とも何度か交流をしたことがあります。その人はフィリピン人で全く面識がないのにとても笑顔で接してくれて、とても嬉しかったことを覚えています。タンザニアの人も、フィリピンの人と同じような生活をしていることがわかりました。タンザニアの人たちも笑顔で、生活は裕福ではないかもしれないけれど、とても幸せそうでした。そんな人たちのために僕たちは支援をすべきだと思いました。(中1)

・日本では食生活や住居は満足のいくものですが、発展途上国では食糧不足や紛争そしていろいろな伝染病によって大切な命を失われていく。そのようなことが起きないためにも僕たちはどのようなことをすればいいのか。そういう疑問を投げかけ、答えを求めていく重要な授業であったと思われました。(中2)

・エイズに関しては周りの人が関心らしいとか、自分が感染したらということを考えたりしたことはありませんでした。また、それによって起こる差別など、自分とは関係ないと考えていました。教育とか、愛情とか、そういうものの大切さや自分の無知を改めて実感できたかなと思います。こんな知識が生きている人全員に伝われば、少しあは変わるのかわかりませんが、知っておくことは大切だと思います。病気を根治することはできないかもしれません、減らす努力は無駄じゃないと感じます。また、無知のせいで他人を傷つけることがないように極力努力したいと思いました。(中1)

・無知ゆえに人を傷つけてしなうのは残念だと思う。日本人は一般から逸脱したものを嫌い排除しようとし、社会もそれを認める傾向にあると思う。せめて偏見を持つのではなく、無知を理解した上で、他人の人権を尊重したい。(高2)



(「タンザニア史」 授業の様子 高3)



(授業をしているわたし)



(学園祭展示のようす 1)



(学園祭展示のようす 2)



(授業の様子 中1)



(授業の様子 中1)

●引用文献

- ・アフリカ現代史(山川出版社)
- ・アフリカ史(山川出版社)
- ・エイズと生きる時代(池田理恵子著 岩波新書)
- ・地球の歩き方「東アフリカ」
- ・(くらべてわかる世界地図4) 福祉の世界地図(大月書店)
- ・エイズにたちむかう 貧困と健康(ほるぷ出版)

- ・MAJOR EVENTS IN AFRICAN HISTORY
(NYAMBAJI NYANGWITE PUBLISHERS)
- ・世界国勢図会
- ・外務省HP
- ・網走支庁HP など